

飢えや渴きのことを考えると心配で、いても立ってもいられず、兄がどこにいたとしても、恐れや混乱の霊による圧迫から兄を救ってくださるように、イエスの御名の力を呼び求めました。

あの祈りの集いで語られた預言の言葉を時々考えました。そして兄の行方不明という苦しい出来事を通じて、神が私にお語りになりたいことは何でも聴き取れる「聴く心」を与えてくださいと神に願いました。一つの聖書のみ言葉が私の頭から離れませんでした。

「私があなたを忘れることは決してない。見よ、私はあなたを私の手のひらに刻みつける」（イザヤ四九・一五、一六）。

警察に通報し、ホームの回りを搜索し、バスの運転手にも連絡をとりましたが、分かりません。ホームに住んでいる人がバスの停留所の方に歩いていった兄を見たという以外は誰も兄を見た人はいませんでした。新聞の「尋ね人」の欄に兄の特徴を載せ、見た人からの連絡を待ちました。パトカーも出動しましたが、兄がどこにいるのか全く分かりませんでした。二

晩が過ぎ、もう奇跡でも起こらない限り、兄の命が助かる可能性はまず、ないだろうと思っていました。その日曜日のミサ朗読箇所は、ルカ十一章九節―十三節で、「求めなさい・・・探しなさい・・・叩きなさい・・・」というみ言葉でした。奇跡など信用していませんでした。奇跡などが与えられ、さらに求める恵みが与えられ、さらにその願いは必ず聞き入れられると期待する信仰が与えられました。私は奇跡が起こると信じました。こうして三日三晩が過ぎました。

四日目の朝になって兄は見つかりました。ホームの裏庭のやぶの中で瀕死の状態で兄は倒れていたのです。食物も食わず、水も飲まず、病気に必要な薬も飲まなかったのに、兄は生きていたのです！本当に奇跡でした。私はすぐに病者の秘跡を兄に授け、救急車を呼んで病院に運びました。夜中の寒さや日中の強い陽射しから保護されることもなかったのに、兄は風邪すら引いていなかったのです！ひどい日焼けで脱水症状になり大変弱っていました。病院で治療を受け少しずつ回復し始めました。

このこと以来、兄はすっかり私に頼るようになりました。私は兄と一つ違いでした。母は私が小さいときに亡くなり、私が十四歳のときに父も亡くなったので、姉と私は叔父とくらすことになり、弟はもう一人叔父の所に預けられました。兄だけはそのまま家に残ったのでした。その後、私は司祭になつて日本に来てしまい、兄は兵役で二人はほとんど会うことになつた兄弟でした。

しかし、あの出来事があつてからの私たちは急速に親しくなりました。それからの毎日は本当に幸せな恵みの時でした。私は毎日病院に行き、兄と共に楽しい時間を過ごしました。初めて兄弟らしい親しい交わりを持った日々でした。五週間後には、兄は退院してホームに帰ることが出来ました。ホームでは少しずつ散歩の練習を始め、回復するように努力していました。少し歩けるようになってから二日目のこと、看護婦さんに車椅子に乘せてもらった兄は急に気分が悪くなりベッドに戻されました。脳溢血だったそうです。それから間もなく、兄は本当に静かに亡くな

りました。退院して一週間目の九月四日のことでした。兄は七十五歳でした。

兄が生きている間だけは兄の側にいてあげたいと思っていた私は、全てを神にゆだねていました。神はこの私の願いをかなえてくださいました。兄が神のもとに帰ってしまった今、私がオーストラリアに留まる意味も理由もなくありません。こんなにはつきりとしたしるしはあるでしょうか。私は兄のお葬式をして、兄の身辺の整理も済ませて日本に帰って来ました。

このすべてはカリスマの刷新を通して、神が私にくださった恵みです。五年前の私だったら奇跡など信用しなかつたし、しるしを求めて祈ることなどしなかつたでしょう。全てを神に委ねることや、この状況にこのように対応することは、以前の私にはとても出来なかつたということは確かです。そして神は、私が兄の側にいるという安心感のうちに兄をご自分のもとに帰らせてくださいました。私も兄の心配から解放されて、神の御旨のままに日本に帰ってくる事ができたのです。主に栄光！